

者にかかれと勧められました。医者に診てもらったら一カ月の休養と茶色の水薬をくれました。飯盒の蓋一杯の米のお粥とパン二切れとスープが一日の食事です。

帰国の道は二十四日間かかってナホトカへ、昭和二十三年六月二十六日「第一大拓丸」で舞鶴に帰りました。兄と一緒に志願して虎林の兵器廠に勤務していましたが、建物が未完成のため不衛生な生活をした上、ソ連に抑留され、シベリアで死亡しました。

軍関係の家族は平壤収容所に収容され、私の妻は三歳の長女をジフテリアで亡くしました。昭和二十年十二月三十日だそうです。帰国後一男一女に恵まれました。

余談ですが、昭和十八年八月頃、関東軍司令官梅津大将が野戦兵器廠本部を巡視でみえた時、私はドアの開閉係を命ぜられておりました。閣下が帰られる時、私がドアを開けると「ご苦労」の一声を残されて帰られたのですが、前に申し述べたように、その時は戦況不利、前途に不安を覚えていた頃です。私達下級軍属

の間でも「貯金するな、家族を労え」とささやかれていたのですから、閣下はすでに前途を見透かして、下級軍属の行く末を案じられ、「ご苦労」の一言に託して慰められたのではないかと推察している次第です。

奇なる哉、我が戦運

満州く内地

埼玉県 寺本 近造

私の徴兵検査の頃は、未だ支那事変も勃発していませんでしたが、世間は何か騒がしい時代でした。東北地方は冷害などのため、故郷を離れ都会に集まって職を求める者が男女を問わず多くいました。

私の家は当時埼玉県入間郡（今の入間市）で農業を営んでいたのですが、麦と芋を主としていましたから農業だけでは家計が成り立たなかったようです。三男の私は初めは父と一緒に農業に従事していたのですが、兄二人は所沢へ勤めに出ていたので、耕地六反

歩の農業だけでは生計は立てていけないことは十分知っており、私も勤め人となりましたが、昭和十（一九三五）年徴集者の兵隊検査で甲種合格となり、兵隊に行く日を待っていたのです。

入営は昭和十一年二月二十七日。その日はあの二・二六事件の翌日であり、しかも私が入る連隊は歩兵第一連隊です。東京駅集合ということで、現地満州から来た曹長の引率者により一個中隊ごとが集まったのです。本来なら青山の第一連隊に入るはずなのに、役場から兵事係が来て出征の日を知らされたのでした。集場所の東京駅までは村の人たちが送ってくれましたが、我々は専用車両に乗車を命ぜられての出発です。東京は前日の大雪で道路はまさに雪道でした。あの光景は忘れられません、二・二六事件の内容や状況など新規入営の我々兵隊が知る由もありません。

我々の原隊は満州の三江省、牡丹江から八時間もかかる勃利の独立守備隊の中隊であると聞かされました。広島の旅館で一泊、そこで軍服に着替えたので

す。それまでは一般市民と同様の服を着ているの汽車の旅であったのです。本来なら、歩兵第一連隊の兵舎に入り、初年兵の教育を受けるのだと思っていたのですが、広島の旅館で兵隊になったような、変な気がしたものです。私服はまとめて小包にして実家へ送りました。

実際には、その旅館で初めて二・二六事件のことを聞き、「あれ……」と思ったのですが、上官の命令で六時頃就寝させられました。

翌日、宇品港で乗船出帆、大連へ着いたのは昭和十一年三月一日だと記憶しています。翌二日下船、この貨物船は「高尾丸」という五〇〇〇トン級の船でした。冬の海は荒天のため大揺れで、心細いやら恐いやらでしたが、内地の二・二六事件を思うと「えらいことになった。日本はこれからどうなるんだろう」と船の中で皆と話をしたことを覚えています。今思えばこの頃から日本は大転換をして、支那事変拡大、大東亜戦争と世界の大戦へと進んでいった序曲の時で、それを聞きながら、初年兵たる私達は満州大陸の土を踏ん

だわけです。

大陸の列車は日本と違って広軌道でした。大連を出発しましたが、昼間だけ走り夜は引込線で待機してしまいます。その間我々は列車の中で寝ていました。三月になったというのに満州は寒く、目的地勃利に着いたのは三月六日と記憶しています。初めて見る満州の大地は日本とずいぶんと違って見え、いよいよ戦地へ来たのだなあと感じました。四月雪が降ってから春が来るのだと引率の曹長殿に聞かされ、春の暖かさが待ち遠しいという気がしました。

いよいよ、独立守備隊第三十四連隊第一中隊入隊です。初年兵教育は、小銃、軽機関銃、擲弾筒、馬が五頭、乗馬と駄馬で、馬は十五頭ぐらいで飼育の世話をせよとのことでした。

初年兵教育の時、中隊には古参兵で癖が悪く進級しない万年一等兵が数人いて、二年兵からそばへ寄るなと教えてもらい助かりました。初年兵時代は古兵や上級者からビンタ（罰として頬などを叩く）をもらいま

したが、私は少ない方でした。特に、鈴木部隊長が大変良い人で、今まであった「私的制裁を禁止する」とやかましく言われ、中隊内でのビンタは少なくなってきました。軍隊での初年兵時代の教育訓練は当然厳しいものですが、それより辛いのは内務班での私的制裁です。一期の検閲も終了し、やっと一人前の兵隊になり、満州の気候にも慣れて、二年兵になってから私は自分の体験から、可愛想だから下級者にビンタはとりませんでした。

独立守備隊の勤務は警備ばかりではなく、当然戦闘にも参加することがしばしばありました。私は軽機関銃の射手として討伐に参加しましたが、二人も戦死したこともありました。中隊に出動命令が出ても、警備、勤務とあり、一個中隊で討伐に出動できるのは四十〜五十人です。情報は中国人からの連絡が多いのですが、出動すると匪賊は移動し撃ち合うことなく帰隊することもあります。しかし、私は二回拳銃で撃たれ、頬と腕を負傷しましたが、夜間で敵は逃げてしまいました。

昭和十一年十一月末に、珍しい大雪（一メートル三十センチぐらい積もり、春になっても解けなかった）が降り、十二月に討伐に行きましたが、雪の中を進むので行進はなかなか困難でした。十六時三十分頃部落のつもりで近付いたら敵の一斉射撃をくい、一人は頭を撃たれ、腰と腹へも命中し即死。一人は腹へ三発当たり重傷でしたが病院へ護送し助かりました。腹部は胸部と違って苦しみながら戦死することが多いのに、運が良い人でした。

敵は百人ぐらい、こちらは四十数人であるから倍の敵、しかも敵は部落を楯とし、こちらの状況は判っており、これに対しこちらは不意打ちであり、敵部落の状況も不明という不利な条件でした。とくに、雪が深いので我が隊は散開出来ずですが、小隊長の指揮で一時間ぐらい戦闘をしました。敵は部落の土塀に隠れて撃つ、こちらは敵からは丸見え、しかも遮蔽物は雪のみ、という不利な状況でした。敵は暗くなって退却しましたが、相当死傷していると思うのですが、死体を収容して逃げたようでした。

昭和十二年七月、樺川県佳木斯という大きな街に移動し、警備・討伐などに参加していましたが、七月六日まで軍令により、戦地勤務一カ月につき三カ月加算と軍隊手帳に書かれています。昭和十二年七月七日からは支那事変というので、我々の佳木斯以前も戦務甲ということだと人事係に教えられました。

また、昭和十二年正月から次のような勤務に就いたこともありました。樺川県鶴岡鎮から入り、ソ満国境を測量する技師三人を警備掩護する命令を受けました。なぜ冬期にするのかというと大地や河が凍らぬと測量器等の輸送が出来ぬからということでした。警備の我が隊は三十二人でしたが楯を使って出発しました。黒竜江の対岸はソ連領です。しかし河川や湖沼は凍ってしまい陸続きと同じことです。どこが国境やら判らぬし、日本の主張する国境線とソ連の言う国境線は違うから国境紛争が時に起こるのです。そのための警備が我々の任務ですから、ちよっとの油断も出来ない緊張した日々、日夜でした。昼間、ソ連領を望遠鏡で見ますと、きれいな民家があり、雉が鳴いていると

いう長閑な時もありました。

住木斯附近の警備は、鉄道線路の監視警備でした。

分遣隊は駅のそばにあり、十人くらいで駅を守ります。また監視隊は山の頂上のトーチカに入って、線路、敵情の監視です。線路は長距離なので巡察は出来ません。列車には五人宛交替で警乗兵が乗ります。警乗は部隊から出ますが、トーチカの監視は分遣隊の任務です。大きな戦闘は少ないが、ゲリラ戦や匪賊討伐は時々あり、瞬時も油断出来ない独立守備隊の任務です。

十二年七月七日は、先程も申した支那事変勃発の日ですが、満州の警備隊に出動令は出ず、関東軍は対ソ戦が任務ですから我々も鉄道沿線の警備が続きました。しかし、万里の長城附近の部隊は北支への移動があり、満州もだんだんと平穏ではなく、我々兵隊にも緊張が高まることヒシヒシと感じられるようになりました。しかし、私は昭和十四年五月五日、兵長に進み、下士官適任証を受領、同時に現役満期除隊となりました。

この満期の前の昭和十三年の冬、大阪の第四師団が関東軍へ転属となり、我々は大阪師団と合同演習をしたことがあり、私が衛兵勤務に就いていたことが、満州での思い出です。除隊後我々は満州に残り糧秣や衣料の補給廠に勤務することになりました。

昭和十四年夏、ソ満国境でノモンハン事件が勃発しましたが、補給廠の軍属として興安嶺で木炭用材伐採の監督をしていました。我々は補給廠勤務で各方面へ食料・衣料のほか軍用品の補給をしていましたので、どこに何部隊がいるということは判っていません。補給廠には兵隊出身の者が十六人おり、兵器関係以外の特に食料・衣料が主で大きな倉庫が沢山ありました。その他、野外に野積みのももあり、糞や麦にアンプラを掛けてありますが大きな野鼠が多く、その害も多かったと思います。

補給廠には精米工場もあり、トラック十二台で毎日各地へ物資補給をしていました。しかし、実家の父の具合が悪いというので、昭和十六年十二月二十六日辞職をして内地に帰りました。ですから、大東亜戦開戦

の月に帰宅したわけですが、父は昭和十七年四月に死亡、しかし約四カ月親のもとで孝行が尽くせました。現役で家を出てから実に六年四カ月目のことで、感無量でした。

私は満州から帰る時、もう一度満州へ戻るつもりでおりましたが、母一人を置いて満州へも行けず、立川飛行機へ勤め機械工をやっていました。そのため軍需工場の技術者として召集が延期（航空機生産が戦争遂行の最重要課題であった）となり、特に私は陸軍の戦闘機「隼」の組み立てをやっていたためであったかと思えます。その工場は、軍の工場でもあるので現存しており、三、四年前見学に行き、懐かしい思いでありました。

終戦となり退職し、他へ勤めをしたり、野菜を作ったり、一時、米軍の進駐軍に勤めたりしていました。が、機械工作の技術があったので杉山製作所というチェーン工場へ六十三歳まで勤めることが出来ました。今は八十三歳で老人会の会長をやったりで多忙、

子供は五人、皆独立し世話無しです。

人間の運命は奇なものです。私は作戦にも出たし、負傷もしましたが、死んだ人は気の毒でした。私の家は五人兄弟のうち、戦争でトラック島へ行く途中海没、西部ニューギニアで戦死など、現在生き残っているのは私一人です。

思えば、若い命を特攻として捧げた人、戦争のため食うや食わずで死んだ人も多くいらっしやいます。私の満州での戦友も、補給廠に終戦まで残った人は現地召集で生死不明で、私の確認によれば、生存して帰った人は三人だけ、しかし、最後の一人も昨年死亡しています。

私が帰還後、満州とは文通していましたが「満州は大丈夫」と言っていました。内地は物資が無いのに、あちらでは物資はあったらしいのです。そのうち、満州からの手紙が発信から着信まで日数が延びてきました。何かあったのではと心配しましたが、当時は内地も大変だったので……。そのうち終戦、戦後の満州はまた軍・官・民の人たちは大変だったことを知りまし

た。

私は立川飛行機まで八高線回りなので二時間かかりました。立川飛行機への空襲は夜でした。その時私は昼勤務でしたので助かりました。もし夜勤でしたら死んだかもしれません。組み立て工場の大きいのは爆撃で破壊され、相当の犠牲者が出ています。空襲警報が出て逃げ間に間に合わないのです。

立川飛行機夜勤の時、蒲田方面空襲を見ました。B29爆撃機が中央線上空を低空で飛んでいきました。東京方面だなど思い数えましたが、三〇機までは数えたのですが後は数えられませんでした。その後、東京方面がたちまち火の海となったのを見ました。

このようなことを今断片的ですが思い出しています。現在私が生きてこられたことは「奇なるかな我が運命」と深く感じるものです。

在外引揚、現地召集、

抑留・強制労働、そして帰還

長野県 赤羽一成

大正五（一九一六）年九月十九日に生まれた私の戦中の体験は、次のごとき労苦の連続であった。

昭和十五（一九四〇）年十二月、渡満、奉天市

昭和二十年五月、召集、北満州石頭、迫撃砲隊入隊

昭和二十年八月十七日、終戦につき除隊

昭和二十年九月、捕虜となりシベリア、チタに送ら

れ強制労働につく

昭和二十四年五月、ナホトカより帰国し、敦賀港上

陸

私も家族は満州の奉天に在住、生活していたが、

私は昭和二十年五月、現地召集となり、入隊は北満州石頭（牡丹江省寧安県）の迫撃砲隊であった。年齢は